

# ばってん

事務長会報第49号

令和3年3月31日

長崎県公立学校事務長会  
長崎県立長崎西高等学校内

〒852-8014

長崎市竹の久保町12-9

電話 (095) 861-4770

## 何とかなるもの、ならないもの

事務局長（虹の原特別支援学校）木下 公朗

令和2年度は新型コロナウイルスに振り回された1年であった。本事務長会でいえば、春季事務長会が書面開催、秋季事務長会が1日への短縮日程、各地区の研修会が軒並み中止され、夜の会もなくなってしまった。年に2回の一同を会しての懇親会がなかったことにより、新任事務長の方、退職される先輩事務長さん方との時間を過ごすことができなかったのは誠に残念である。

世の中においても、様々なイベントが延期・中止に追い込まれ、スポーツ観戦も無観客（のち人数制限）で行われた。そこで、新しい生活様式というオンラインでの観戦による家飲みなるものが増え、家庭からの資源ゴミ（空き缶）も増えたとのことである。私個人においても自分で出したゴミを、頻繁に集積場へ運んだが、ある時期2週間（も）アルコールを絶たなければならなかった。今まで人間ドックで検査入院する以外はきちんと（？）実践していただいただけに苦しみはあったが何とかあった。

このコロナ渦において懇親会がなくなったことは残念だったが、今後無くしても（全く）影響がないようなものも多かった気がしている。（行事への来賓出席、各種会議の削減や簡略化…）これも何とかなるもの、今後も続けられたら…。

ほかにも様々な対策が学校において実施された。車内の密を避けるということからスクールバスの増便もその一つである。ただ、それ以上の影響が大きかった。まずは添乗する介助業務職員の確保である。年度当初の人数配置も満たしていない中、緊急雇用3名の確保ができたのは10月の中旬であった。大変なのはそれだけではなく、敷地内にバスが入ってくるといことは、停車場とUターン場所の確保が必要である。一部の職員駐車場を充て、職員は隣接の県立学校の敷地を使用させてもらっている。本当にありがとうございます。何とかあってはいるが、ずっと続くとなると…。この原稿を書いている時は、新型コロナは第3波と言われており、「GO TOトラベル」の停止、緊急事態宣言の発出など、今後の見通しは不明である。何にしても早期の収束を願うばかりである。

さて、令和3年度の事務長会は、令和2年度に引き続き「働きやすい職場環境づくり」に取り組むことが秋季事務長会で決定された。昨年度は十分な協議ができなかったことから、活発な意見交換をお願いしたい。事務職員の意見を聞いて、それを吸い上げる仕組みができないものか、解決に結びつかない案件もあるなど各校事務室の状況は様々であろうが、働きやすい事務室づくりとともに、次期事務長候補者の人材育成をしていかなければならない。

事務長会においても平成28年度から30年度まで「人事評価と人材育成」に取り組んだ経緯があるが、いよいよ、給与への反映が近づいている。これからますます評価者の説明責任が問われることになり責任が増すということである。何とかなるのか？

他県においては本県より早く給与への反映が行われているが、やはり人材育成と密接に関係しているようである。ある県では「まかせる」ことでモチベーションが上がり、次期事務長への力量がついたとのことである。まさに「やって見せ、言って聞かせて、させてみて、ほめてやらねば人は動かじ。…」やはり、ほめてもらって嫌になる人はいないだろう。時代は変われども名言を再認識した。名言は不滅だが、時代は変化している。新しい生活様式を取り入れながら、押し寄せてくる様々な業務の中、定時退庁できる素敵な職場を実践したい。

自分自身、人の顔を覚えるのは大の苦手である。多くの職員がいる学校においてマスク姿の人の名前を覚えるのは至難の業で、職員が退室した後、周りの職員に所属と名前を確認することが日常化してしまった。何ともならなかった一つである。



## 県立学校勤務30年、高教組専従7年

諫早特別支援学校 山口 徹

最初の赴任校である松浦高校鷹島分校は、職場の雰囲気がとてもよく、誰かが暗い顔をしていると、彼（女）を励まそうと夜は飲み会が始まり、ほとんどの職員が2次会・3次会と付き合いの仲の良さで、一大行事だった職員旅行や忘年会など、楽しい思い出ができました。その後、島原商業高校では検定合格にしのぎを削る商業教育の世界をのぞき、島原農業高校と諫早農業高校では畜産経営での雄のはかない運命に同情し、長崎工業高校定時制夜間部では工業教育の専門性の高さを知り、働きながら学ぶ生徒たちの姿に頭が下がりました。盲学校と諫早特別支援学校では障害を持って生き、学ぶことの一部を知り、川棚高校では高校改革の狭間で悪戦苦闘している普通高校の現実を再認識しました。

これまでの勤務で一番違和感があったのは、何の専門知識もない私たちが工事を担当することでした。多少の経験があったとしても、わかったような顔をして工事の設計・監督・検査を行うのはいかがなものでしょうか。さらに深刻なのは、職員数が減っているのに学校事務の

業務量は減らず、逆に増えたり、複雑になっていることです。現場の事務職員のやる気がいつまで持つかととても心配です。

国立国会図書館法前文にある「真理がわれらを自由にする」という言葉を座右の銘にして、私は10代から40代前半までさまざまな市民運動・労働運動に関わりました。そのひとつが高教組でしたが、組合の方針や政府・文科省の政策、研究者の見解、学校・社会の実態をにらみながら真理はどこにあるのか追究する作業やその実現をめざす運動は、やりがいのある魅力的な仕事でした。意見が厳しく対立したり、温かい声援をいただいたり、成果が出たり出なかったり、地域の方や他県の教職員と交流したりと、得がたい経験の数々でした。

さて、お別れの挨拶のような文面になりましたが、先の年末ジャンボも空振りに終わってしまい、やむなく私は再任用するつもりです。今後ともよろしく願います。



## すべての方に感謝！

島原工業高等学校 林田 耕



広報部に所属し「ばってん」の担当として編集に携わってききましたが、私自身は文章を書くのが苦手で、いつも先輩事務長さん方の寄稿文に感心していました。そんな私が今回、退職にあたり最後の役目として、拙い文章ですが寄稿させていただくこととなりました。

昭和60年4月、初任校は北松農業高校でした。初めての勤務に加えて、島原半島出身の私にとっては知らない土地への不安もあり、すごく緊張して赴任しました。そこで何といきなり4月に「監査」でした。何もわからないまま、毎日遅くまで残って書類を見ていました。

元号が「平成」へ変わるとともに島原高校へ。普賢岳噴火災害が発生し、想定外の出来事が続き事務処理に追

われましたが、非常に貴重な経験となりました。その後少しだけ行政を経験して、長崎東高校へ。県下初の県立中学校の開校に携わることができました。同じ校内に、まるで体格が違う中学1年生と高校3年生がいるのは、何か不思議な感じでした。次に鶴南特別支援学校へ。ここでも県下初となる分教室の開設を経験しました。拠点校の皆様には、他校職員に係る事務を行っていただき大変お世話になりました。その次は島原農業高校へ。道路建設に伴う牛舎・実習地の移転、新築・造成がありました。国・県・市・学校が関係した事業でいろいろと勉強になりました。その後事務長として口加高校、島原特支、そして「令和」になり現勤校の島原工業高校へ。最後の年である今年度、新型コロナの影響で生徒たちがいつも通りの学校生活を送れなかったことが残念でした。一日も早く本来の学校生活ができるよう願っています。

それぞれの勤務校でのいろいろな出来事が思い出されます。同時に、その時に関わったたくさんの方々も思い出されます。今、退職を前に思い出として振り返ることができるのは、一人では何もできなかった私をいつも助けていただいた多くの皆様方のおかげです。すべての方に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

## 小さな島の大きな挑戦

奈留高等学校 楠田 貴史

本校は、昭和40年五島高校の分校として開校、昭和51年に奈留高校として独立した後、今に至っています。全校生徒は29名という離島の小さな学校です。奈留高校と言えば、ユーミンの歌詞「瞳を閉じて」が有名ですが、校門入ってすぐ左手の庭園に立派な歌碑が建っています。ちなみにこの歌が本校の校歌と思っておられる方も多いようですが、校歌は別にあり、愛唱歌という位置付けに

なっています。

その他、本校の特色として、小中高一貫教育と離島留学制度（E-アイランドスクール）があげられると思います。中でも離島留学は、平成30年度に始まったばかりで、現在は、在校生のうち半数が離島留学生となっています。今年3月には最初の留学生の卒業生を送り出すこととなりますが、島をあげての見送りになるのではと思っています。

そんな本校の最近の気になるニュースと言えば、離島留学生用の学生寮「しまなび舎」が、令和3年4月のオープンに向けて着々と準備が進められていることです。

新聞等でご存じの方もおられるかと思いますが、「奈留しまなび協議会」という有志団体（事務局は奈留支所内）が、奈留高校存続のためにはより多くの留学生を受け入れることができる体制を整備することが不可欠として、クラウドファンディングや寄付金、市の補助金を活用して、古民家を改修し、留学生のための寮（一部小中学生向けの学習支援スペース）を運営するべく活動をされています。先日建物の改修工事も始まり、完成すれば9名の留学生が受け入れ可能となるとのことでした。

奈留高校存続のために、このようにしまなび協議会をはじめ、島内外の多くの方々のご支援をいただいていると考えたとき、事務局としてもその期待に応えられるよう頑張らねばと身が引き締まる思いをしています。



## 新鮮な一年

島原翔南高等学校 今富 明美



島原翔南高校に赴任してもうすぐ一年が経ちます。島原市から南島原市へ毎日通勤していますが、目にする色んなものがとても綺麗で感動します。朝焼けの空の色や存在感のある普賢岳、南島原の海岸、山々の新緑や紅葉。長崎市に住んでいた頃は、なんとなく時間に追われ、立山の満開の桜をみても「またこの多忙な時期が」と感じ

るだけで、年をとると感動もなくなるのかなと思っていたので、こういう新鮮な感情に驚きました。

今年度は私にとって、「初めて」が多い年でした。コロナ対応にはじまり、初めての島原地区、初めての事務局長業務、初めての小規模校勤務に初めての一人暮らし。また、今年度ほど飲み会をしない年も初めてでした。

島原半島で生活していると、どこからでも普賢岳が見えます。天候や季節、見る場所により見え方も違います。夏が終わるころ、「せっかく島原半島に住んでいるんだから山に登ろう」と思い立ちました。全くの初心者なので、登山好きな先生のお世話になり、今までに絹笠山、妙見岳、国見岳、普賢岳、矢岳、高岩山などの雲仙の山々を登りました。達成感や爽快感より、今は辛さや苦しさが勝っていて、どうして登っているのかまだよく分かりませんがもう少し続けようと思っています。

また、最近「九州オルレ」という色んなコースがあるトレッキングを始めました。島原半島にも2つのコースがありますので、興味のある方は歩いてみませんか？

今年はたくさんの「初めて」のおかげで新鮮な一年になりました。また、島原も大好きになりました。仕事をしていると憂鬱な「初めて」が多いですが、嫌な事も楽しい事も前向きに取り組みたいと思っています。

## 大気圏内の良識ある人間

五島高等学校 徳山 富美子

本校の生徒会誌の名前は『城跡（しろあと）』といいます。先日、私にも卒業生に贈る言葉の原稿作成依頼がありました。『ばってん』の原稿テーマが思いつかないので、その生徒向けの原稿を少し修正して寄稿させていただきました。

秋の事務長会当日の朝、あるテレビ番組に『テルマエ・ロマエ』で有名な漫画家で随筆家でもあるヤマザキマリさんが出演されていました。17歳で単身イタリアへ渡ったヤマザキさんは、慣れない海外生活を「言語は通じなくても、同じ大気圏内の生き物だから」という気持ちで乗り切ったのだとか。子どもの頃から昆虫が大好きだったけれど、昆虫と意思疎通ができないのは当たり前で、それと海外でコミュニケーションが取れないことの本質は同じという考えのようです。

「大気圏内で考えたら昆虫も人間も同じ生き物で、昆虫図鑑のように人間だけで図鑑ができる」。確かに人間には

多様な人がいます。「普通こうだよ、とか言うけれど普通ってどこの普通？」。小さなコミュニティの中では普通でも、広い世界から見ると普通じゃない。地球規模で考えると普通という概念は存在しないのかもしれない。

また、ヤマザキさんは「常識よりも良識が大事」とも言われていました。常識ではなく経験から培った良識で判断すると、自分がされたら嫌なことは人にしなくなるし優しくできると。

様々な人との出会いの中で、皆さんにもこの人苦手だなと感じる時があるのではないのでしょうか。そんな時、ヤマザキさんのような考え方に少しでも切り替えることができれば、ちょっとだけ心が軽くなるかもしれません。



# ふるさと教育について

県教育庁 教育次長 林田 和喜

本県はもはや全国有数の人口減少県である。少子高齢化による自然減に加えて、若年層の人口流出による社会減によって、より深刻な状況に陥りつつある。

人口減少問題に対して国や地方の取組みが加速化したのは、2014年に日本創成会議が人口再生産力に着目して「消滅可能性都市」に言及したことが大きい。同会議の提言は政府による「まち・ひと・しごと創生本部」の設置につながり、「地方創生」が本格的に動き出した。

私が新上五島町に赴任した平成28年は、地方創生への具体的な動きが始まるとともに、新学習指導要領における新しい方向性として生きる力の具体が提示され、学習過程における「主体的・対話的で深い学び」と、教育活動全体を通じた「社会に開かれた教育課程」の実現が喧伝され始めた頃でもあった。

赴任先の上五島高校はまさに地域の学校であった。平地に乏しい同町において貴重な水田を提供して設置され、グラウンドを含む校地も地域の方々や当時の生徒が整備に加わった歴史がある。地域が熱望して開校した島における最高学府であり、地域の負託に応え人材の育成に努めてきた。しかし、高校卒業後、大半の生徒は就職や進学で島外に流出し、その後も多くは帰ってこない状況が長期にわたり続いてきた。地域課題の大半がこのことと関連している。

そこで、私は新学習指導要領につながる教育の実践と、地域課題への対応を企図して、課題探究型学習を本格的に教育課程に組み込み、町役場の全面的な協力のもと展開することとした。在任1年間の取組みであったが、生徒にとっても地域においても、意識変容の契機となり、現在もその充実が図られている。

翌年、教育委員会に戻った私が直面したのは、県の人口減少対策である高校生の県内就職率向上という課題であった。現在は、県総合計画などの目標値を達成できるところまできているが、当時は県政における最重要課題という意識は学校現場では弱かった。案の定、平成29年度の施策や新年度予算等を議論する中で、若者の県外流出について、知事や議会などからこうした学校の姿勢や取組みに対して厳しい指摘やご意見をいただいた。そこ

で、直接的な解決には至らないまでも学校や生徒の課題意識に迫り改革を促す観点から「ふるさと教育」の事業化を図ることとなった。3年間かけてモデル校18校を指定し、各学校の強みを生かしたふるさと教育を実践し、最終的には全県立高校がふるさと教育の体系を策定するというものである。各学校に大きな負担をおかけしたが、離島の高校を中心にこれまでの実践がさらに深化・発展し、本土部の大規模高校においても探究型学習の一つとして成果を挙げてきている。もちろん、県内就職率の向上にも一定貢献しているものと考えている。

ボーダレス化が進み、グローバルな経済活動が加速するこの時代に、学校において生徒の視野や将来を狭めるような教育を行うことは、あってはならないことだと認識している。しかし一方で、グローバル社会で活躍する人材には、根本に生まれ育った国や地域の文化や歴史などについての正しい理解と誇りが不可欠であると言われている。生き方の軸足が確立していなければ、折角の人材も根無し草のような存在になってしまうからだと私は考える。

予測困難な時代に生きる子どもたちにとって、アイデンティティを確立していく過程での教育はますます重要になる。これまでの学校教育で、お座成りにしてきた「自分がどのように生まれ」「どのような縁を結んできたのか」などの視点から自分自身を振り返り、自己の存在と社会との関わりについて考えることは極めて大切なことだと考える。ふるさと教育における身近な郷土の課題追究や様々な人との出会い等は、必ずや人間的成長を促す学びになると確信している。自分自身としっかり紐付けられたふるさとへの思いと誇りを培う。ふるさと教育の真の目的はそこにあるのではないだろうか。



## 編集後記

歴史ある事務長会報「ばってん」の編集を初めて担当することになり、日ごろ漫画以外の本を一切読まない私には文才のかけらもなく、この編集後記の執筆は本年度最困難の任務となりました。

ましてや本文への寄稿をお願いした林田教育次長様をはじめ7名の皆様には、苦痛を伴う依頼にもかかわらず、快くお引き受けいただき心より感謝申し上げます。先輩事務長の「頼まれたら書かんばね」

の一言には、コロナ禍にあって人間関係がますます希薄になっていく中、相手を思いやる気持ちが心にしみました。本当にありがとうございました。

最後に、本年度でご勇退される皆様、長年の職務を無事勤め上げられましたことを心よりお祝い申し上げます。ご退職後も、幸多き人生を歩まれることを切に祈っております。

(I・A)